スペインとヨーロッパ
—ミゲル・デ・ウナムーノの思想を中心に—

角　田　哲　康

Un pueblo perfecto ha de ser todos en él y él en todos, por inclusión y paz, por comunión de libre cambio.
（完全なる民族とは、包摂と平和によって、また自由な交流によって、自らの中にすべての民族を、またすべての民族の中に自らを存在させるものでなければならない。
（Miguel de Unamuno）[1]

0．はじめに

一般的に、スペインの文化形成には、幾重にも織り重なったフェニキア、ローマ、イスラームよる地中海文化とケルト、ゲルマン系の北欧文化が深く寄与しているとされる。また宗教文化という観点からすれば、イベリア半島はユダヤ、キリスト、イスラームという三大宗教文化が融合した場でもあった。しかしながら、こうしたいくつもの文化的要素がイベリア半島に流入してきたゆえに、スペインの知的活動は、時として受動的なものとして捉えらた。スペインとヨーロッパとの関わりは、かくして双方向の知的交流のものとしてではなく、「スペインは、はたしてヨーロッパなのか」という地理的次元のものとして扱われることさえもあり、それは後述する「スペイン学問論争」に象徴されるように、スペインにおける学問の主体性のみならず、その存在自身を問うという根源的な問題となった。

だがスペインにおける知の系譜を遡及的に辿れば、能動的な知的努力が見出されることになる。例えば10世紀のコルドバでは、イスラーム文化経由でイベリア半島に伝えられたプラトン、アリストテレス、そしてプトレマイオスなどのローマやギリシャの哲学がラテン語やカスティーリャ語に翻訳され、それらの言語で研究されることでヨーロッパに体系的に紹介された。13世紀のトレドでは、賢王アルフォンソ十世が庇護を与えた「翻訳学派」が研究にさらに幅と深みを与えた。この流れは、スペイン・

1）Unamuno, Miguel de: *En torno al casticismo*, p. 851.

ルネッサンスやスペインが誇る文化世紀である黄金世紀へと繋がってゆくことになる。そこには、地理的、歴史的概念としてのヨーロッパとスペインの結びつきに、精神文化としてのスペインをも重ね合わすことができるのである。

1．知の開放

ヨーロッパに能動的に知の開放を行った「開かれたスペイン」は、15世紀末のアラゴン王国フェルナンド二世、カスティーリャ王国イサベル一世のカトリック両王による統治の時代を経て、1516年のカルロス一世に始まるスペイン・ハプスブルグ家の汎ヨーロッパ主義の中でさらに展開されてゆく。それは、例えば、サラマンカ大学教授で人文主義者のアントニオ・デ・ネブリハが、1492年にイサベル一世に献辞したカスティーリャ語初の文法書にもみてとれる。8世紀近くにも及んだイベリア半島のイスラーム勢力に対する国土回復運動レコンキスタを1492年1月に終えたことで、ヨーロッパにおけるスペイン連合王国の国力が相対的に高まった。これによりレコンキスタの中心であったスペイン・カスティーリャ王国のカスティーリャ語が、ヨーロッパの共通語になりつつあったことがこの背景にはある。こうして言語のヨーロッパへの輸出が行われはじめたわけである。またレコンキスタを完遂させることで芽生え始めていた国民精神が、スペイン連合王国の共通語としての地位をカスティーリャ語に与えようとしていたことは言うまでもない。この国民精神を文字どおり一般民衆が必要としたことが、この世紀から次の世紀にかけてのスペインにおける文化的発展に大きく関与してくることになる。

さらに教育組織の面では、イサベル一世の聴罪師で後に枢機卿となり、カトリック両王の政治顧問でもあったフランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロスが1508年にアルカラ・デ・エナーレス大学を創設したことも大きな意義をもつ。すでにスペインには1218年にアルフォンソ九世によって創設されたサラマンカ大学が存在していたが、このアルカラ大学は世襲的に宮廷の要職に就く貴族に警鐘を鳴らし、高度な専門知識を身につけた有能な者に宮廷登用への扉を開くものであった。まさに知の登用とも言うべき出来事であった。

このような況下で、エラスムス主義がスペインに浸透し始めた。階級制度を否定しながらも、ルターのように積極的に教会制度の改革に取り組むことはしなかったエラスムスの人文主義は、むしろ理性を筆に託した文章家としての評価をスペインで得ていたかもしれない。当時のスペインは、先に述べたように、共通語としてのカスティーリャ語の普及で、文学的努力とも評すべき文学発展の時代を迎えようとしていたからである。ともあれヨーロッパの人文主義がスペインに入ってきたわけである。エラスムス自身も、「Apud Hispanos」という言葉を用い、スペインを豊かな土地でヨーロッ

パにおけるキリスト教の砦であると捉え、当初は親近感を持っていたと言われる。[2] しかし後にアリウス主義の疑いや、本人の思惑とは逆にルターとの近似性までが指摘され、さらに後述するカルロス一世の反宗教改革でのエラスムス主義政策の失敗もあり、1530年にはエラスムス主義者に対する異端審問がはじまる。1535年にはファン・デ・ベルガラが捕らえられるに至って、スペインにおけるエラスムス主義の勢力は表面的には陰りを見せはじめた。しかしこのことは逆に、次章で触れる「知を内へと照らすスペイン」にも関わるのだが、エラスムス主義を内へと浸透させることになったのである。[3]

「開かれたスペイン」の特徴として、ユダヤ人の貢献もさらに指摘することができる。1492年1月2日に国土回復運動レコンキスタが完遂した後、3月31日にユダヤ人追放令が出された。この追放令は四ヶ月以内にスペイン国外に去るか、洗礼を受けるかのどちらかをユダヤ人に迫るものであった。多くのユダヤ人がイベリア半島を後にしたが[4]、重要なことは15世紀以降、商業の世界だけでなく学問の世界においても、改宗者 converso が中心的な役割を果たしたことである。例を挙げてみると、先に触れたカスティーリャ語文法書のアントニオ・デ・ネブリハをはじめ、人文学者ルイス・ビーベス、国際法の父と呼ばれるフランシスコ・デ・ビトリア神父、インディオ開放運動のバルトロメ・デ・ラス・カサス神父、文学ではミゲル・デ・セルバンテス、フェルナンド・デ・ロハス、特定されてはいないが、その内容からして、スペインを代表するピカレスク小説『ラサリーリョ・デ・トルメス』の著者、さらに宗教的指導者としては聖テレジア、フライ・ルイス・デ・レオンなどが挙げられる。[5] またクリスト

2）逆に「Non placet Hispania」という具合に、エラスムスの反スペイン主義、反ユダヤ主義も指摘されている。（佐々木孝、「内側からビーベスを求めて㈢」、『東京純心短期大学紀要　第8号』、p. 62.）

3）スペインにおけるエラスムス主義の興隆についてホセ・ルイス・アベリャンは、「1516年にエラスムスの作品がスペインで翻訳されて以来、16世紀半ばから17世紀の初頭までエラスムス主義は大きな影響を保っていた。しかしその後は、ひっそりと奥深くでその影響を与え続け、今日まで何かしらその影響を残している」と述べている。（*El erasmismo español*, pp. 79-80）

またこれ以降の人文主義について、例えばクシシトフ・ポミアンは「大学では15世紀から早くも人文学芸が導入されており、たとえ時代遅れの争い〔…〕がパリなどで見られたとしても、スコラ式教育と人文主義的教育との共存は成立していたのである。宗教改革が人文主義的教育を利用し、イエズス会が戦闘的な教会の要請に応じてこの教育をとりこんだことから、宗教的には分裂したヨーロッパの統一的な教育の基盤として、人文主義は16世紀以降、機能することになる」（『ヨーロッパとは何か』、p. 79.）と指摘している。

4）およそ5万人ほどが改宗し、16万人以上がスペインを去ったと推定される。その中の多くはポルトガルに移ったが、1496年にはポルトガルのマヌエル一世が、ユダヤ教徒の強制改宗に踏み切った。

5）Castro, Américo: *España en su historia Cristianos, moros y judíos*, pp. 509-531., 646-648.

ファー・コロンブス、そして彼の航海を支援したディエゴ・デ・タラベーラ神父、イサベル一世の財政顧問アブラハム・セネハルも改宗者系の血を引く。イサベル一世はグラナダ征服やコロンブスの航海援助の際には、ユダヤ商人から融資を受けており、夫のフェルナンド二世の母方は改宗者系であった。

1478年に設置され実に1813年まで存在した異端審問所は、もともとイスラーム・ユダヤ教徒を取り締まることが目的ではなかったが、その後改宗者に対する弾圧は厳しさを増してゆく。[6] こうした弾圧の中で改宗者たちは極度の緊張状態に陥り、キリスト教思想と自己のアイデンティティでもあるイスラーム・ユダヤ教思想の狭間で苦悩することになる。しかしこの苦悩こそが、スペインの文化やスペイン人の本質に対して看取力に富む思想や文学を生み出すことになったとも言える。ここにおいては、その後のスペイン人の歴史観にも深い影響を与え、スペイン人の精神性の基本ともなった「根源的な生を求める」姿が芽生えはじめているのである。

2．知の内的投射とスペイン精神

15世紀後半から16世紀前半にかけての「知を放つスペイン」から16世紀後半以降の「内へと知を投射するスペイン」への転換には、ヨーロッパにおける政治力の優位性が揺ぎ始めたことに併せて、スペイン・ルネッサンスと宗教改革の問題が影響してくることになる。1516年にフェルナンド二世の後を継いだ孫のハプスブルグ家のカルロス一世は、拡張主義、すなわち汎ヨーロッパ主義によって、中世キリスト教世界の復興を当初から志した。これによりカルロス一世からフェリペ二世の治世にかけて華を開くスペインのルネッサンスは、極めてキリスト教的な要素が色濃く反映されたものとなった。もともとルネッサンスは中世のキリスト教精神からの開放を目指し、中世との精神的な断絶を意味する。しかしながらスペインは中世との連続を目指すこととなったのである。

こうしてカルロス一世は宗教改革に反対し、ルターとルターを支持するドイツ諸侯の勢力拡大を阻止しようとした。まず1521年にはヴォルムス国会にルターを召喚し、新教を禁止した。こうした宗教改革弾圧に対し、改革派が1530年にシュマルカルデン同盟を結成して対抗すると、すでに述べたように、カルロス一世はエラスムス主義を用いることで宗教統一を図ったがうまくゆかず、逆にエラスムス主義者に対する異端

6）例えばルイス・ビーベスは改宗系の血を引くことが発覚するのを恐れ、17歳でパリに渡って以来帰国することはなかった。ビーベスは、1522年にアントニオ・デ・ネブリハの後任として、当時のスペインにおける人文主義研究の中心であったアルカラ大学の教授にファン・デ・ベルガラによって推薦された際も辞退した。1528年には、1508年に死去したビーベスの母に対する異端審問裁判が始まったほど改宗者に対しての弾圧は厳しかったのである。

審問がはじまることになった。カルロス一世はその後シュマルカルデン戦争(1546-1547)に勝ち、カトリック側に有利な協定を結ぶものの、結局は宗教改革によるプロテスタントの台頭を押さえることはできなかった。ついに1555年には、アウグスブルグの和議を結ぶに至り、ルター派が容認されることになった。信仰の統一はハプスブルグ・スペインの基本理念であり、社会の統一基盤であった。またこの和議はキリスト教世界としてのヨーロッパの分裂を意味し、ハプスブルグ家の汎ヨーロッパ主義はこれ以降衰退することになる。カルロス一世自身も翌年の1556年に退位し、スペインおよびネーデルランドなどの領地をフェリペ二世に、神聖ローマ帝国の帝位をその弟フェルディナンド一世に譲り、隠棲してしまった。後を受けたフェリペ二世は禁欲的な厳しい宗教姿勢をもって、異端としてプロテスタントおよびユダヤ教からの改宗者に対する弾圧の姿勢を強めた。それは理性的な判断というよりも、国民感情としての意味合いが強い。このことは旧教徒であることの誇り、「血の純潔」というかたちで、スペイン精神に永く残ることになる。さらに思想統制のために、1558年には書籍の輸入許可制、翌1559年にはボローニャ、ナポリ、ローマ、コインブラなどスペインの公的学生寮がある場所以外への国外留学や、これらの地以外で教鞭をとることが禁止され、ヨーロッパに対して開かれていた扉が閉じられはじめたのである。

この一連の動きによるスペインの知的孤立は、文化という観点からすれば皮肉なことに、スペイン黄金世紀を生み出すことになった。黄金世紀とは、一般的に、政治面では16世紀前半、文化面では16世紀後半から17世紀前半を指す。このように政治の繁栄期から遅れて文化の繁栄期が顕れることが、スペイン文化の特徴の一つでもある。

黄金世紀は知的孤立によって育まれた、言わば国粋主義的なスペインの精神性の産物である。これは、理性よりも生を、科学よりも信仰を、全体よりも個を重んじる精神性である。宗教改革においても、スペインは信仰の問題に理性の解釈を認めようとはしなかった。理性よりも個人的な生の充足を優先させるこの精神性は、観想的な宗教精神をもたらし、ヨーロッパの他の国々よりも、個人性の強い神秘思想を生み出した。このスペイン神秘思想は、最終的には単なる観想的なものにとどまらず、極めて実践的かつ教育的色彩の濃いものとなり、日常の生活の中、すなわち個人の生の中に神との接触を求めるものとなった。

この点に関して、スペイン精神の原点の一つとしてスペイン神秘思想を見出した思想家ミゲル・デ・ウナムーノ(1864-1936)は、スペイン神秘思想を代表する一人であり、先に触れたように改宗者の家系である聖テレジアを例に挙げ、次のように述べている。「[聖テレジアの作品] そこに見られるのは、個性(これは人格性とはまったく異なるものである)と自由意志のきわめて力強い主張、そして汎神論に対する大変な用心深さである。この血統には、そうした神秘的個人主義が生きいきと脈打っている〔…〕。この個人主義は、実に根強いものであり、十字架の聖ヨハネがあらゆるものか

ら離脱せんと欲するときでも、それはすべてを得るため、神ならびに神と共なるすべてのものが自分のものになるように虚無を求めるのである。」[7] このウナムーノの思想展開とヨーロッパとの関わりは、後述することにしたい。

3．スペイン問題：スペイン主義とヨーロッパ主義

ルネッサンス、バロックを支え、近代ヨーロッパ文化の基底となった理性主義と科学主義に対してスペインは、他のヨーロッパ諸国とは異なるスタンスを取ってきた。三十年戦争とスペイン王位継承戦争の結末であるウェストファリア条約（1648）からユトレヒト条約（1713）に至る半世紀ほどの間に、ヨーロッパ諸国では国民と国家という関係を法的に捉える理性的な新しい国家概念が生まれた。一方、スペインはこの新しい国家概念を受け入れることができず、キリスト教的精神に基づく旧国家体制の維持を目指した。フェリペ五世によって1700年に始まったブルボン家統治のスペインは、ユトレヒト条約によってヨーロッパにおける植民地をすべて失っており、中南米の植民地に再び目を向けざるを得なかった。近代化という点だけでなく現実の政策面においても、ヨーロッパ諸国とスペインの距離は広がる一方であった。

17世紀以降の長期的なスペインの没落を前にし、スペインのあるべき姿をめぐって、スペイン内に二つの立場が存在することになった。一つはスペイン主義で、それは伝統主義であり孤立主義であった。今一つはヨーロッパ主義で、進歩主義であり世界主義であった。この二つの立場の対立はスペイン問題 el problema de España と呼ばれた。言うまでもなく地理的には、イベリア半島はヨーロッパの中に位置する。精神文化の点からしても、イスラーム文化が保持していたギリシャ、ローマ文化を、コルドバやトレドでの知的活動を介してヨーロッパに伝えたという自負がスペインにはあった。また黄金世紀によって生み出された文学や美術は、ヨーロッパに大きな影響を与えていた。スペイン問題は、言うなれば、スペインとヨーロッパの地理的・精神的な繋がりと現実的な繋がりの間の懸隔に根差すものであった。

しかしながら、すでに述べたように、知の開放によって究竟的には知の孤立がスペインにもたらされ、さらにこの孤立がヨーロッパに影響を与える独自のスペイン文化を生み出すという具合に、二つの主義の対立関係が、ある意味では、相互依存的な関係であったことがスペイン問題を複雑なものにした。またこのスペイン問題は、スペイン人に「スペインとは何か」というアイデンティティを問うものでもあり、それは愛国精神を伴うものであった。だがこの愛国精神はともすればアイデンティティの本質について洞察することよりも、どこにそれを求めたらよいのかという一種の存在論

7）Unamuno, Miguel de: *O.* cit., p. 841.（『生粋主義をめぐって』、佐々木　孝訳、pp. 103-104.）

的な意味合いを強め、近代化を求めながらも逆に過去の華やかな歴史を再度取り上げる傾向を強めてしまった。後述するメネンデス・ペラーヨに代表されるこのペダンティックな姿勢は、その一つ一つの歴史的事実を理性的に捉えるというより、感情論的なものになりがちであった。ここにも理性よりも生を重要視する傾向が見られるのである。

17世紀に入るとフランシスコ・デ・ケベードやバルターサル・グラシアンのような奇知主義の作家たちによって、すでにデカダンスの様を呈し始めていたスペインに対する批判は行われていた。だが、こうしたデカダンスを分析し、問題解決のために具体的な作品にまとめあげる傾向は、18世紀に新古典主義、啓蒙思想がスペインにもたらされてから顕著になってくる。これは民衆の教育に力を注ぐ啓蒙政策を取ったカルロス三世による点が大きい。この時代は、国の進歩の基礎が教育にあると初めて気づいた時代であると言えよう。

1789年に出版されたホセ・カダルソの『モロッコ人の手紙』は、スペインの没落をアフリカ人の目を通して描いたもので、絶え間なく続く戦争や労働意欲の低さ、保守的精神など、没落の原因を具体的に指摘している。これはヨーロッパ主義の先駆けとも言える作品である。このヨーロッパ主義は、19世紀の前半に幾つものエッセイを発表したジャーナリスト、マリアノ・ホセ・デ・ララに引き継がれる。代表作『明日出直しください』(1832)で鋭く批判されているスペイン人の労働面における怠惰な様子は、カダルソによって指摘された問題と同質のものであり、そこにいつまでたっても変わらないスペインの悲劇的な現実が描かれているのである。カダルソ、ララはともに外国人の目を通してスペインを批判することで、ヨーロッパの進歩主義に目を向けさせ、スペイン人に意識改革をもたらそうとしたわけである。啓蒙政策を取ったカルロス三世はもともとナポリ国王であり、カダルソは幼少の頃からヨーロッパ各地を旅し、ララは父がナポレオンの兄ホセ一世の軍医であった関係からフランスで初等教育を受けた。このようにスペインの本質に関わる問題は、先のコルドバ、トレドの頃から常にヨーロッパとの関わり、「開かれた環境」の中から提起されてきたのである。

一方、マドリード大学のスペイン文学史教授であった碩学メネンデス・ペラーヨは『スペインの学問』(1880)において、哲学をはじめ、神学、政治学、経済学、法学、芸術等の学術史におけるスペイン人による輝かしい功績を指摘し、ヨーロッパの人文科学発展に貢献するものであったと主張した。これは、1876年にグメルシンド・デ・アスカラテが『レビスタ・デ・エスパーニャ』誌で展開した「国家が学問の自由を擁護するのか否定するのかによって、国民の活力が国家体制の中でさらに示されるかあるいはその逆になろう。ついにはこの三世紀の間にスペインで起こっているように、その活動が完全に閉塞されてしまうことさえありうるのである」[8] と主張したことに端を発する、スペイン学問論争 La polémica de la ciecia española でのメネンデス・

ペラーヨの反論である。この論争は、「スペイン哲学は神話にすぎない」と主張するマヌエル・デ・ラ・レビーリャや、当初はメネンデス・ペラーヨに同調しながらも、最終的には「スペイン哲学という名にふさわしいのは、スコラ哲学のみ」とするアレハンドロ・ピダル・イ・モンとの論争にまで発展した。[9] メネンデス・ペラーヨの説に対しては、スペイン・ルネッサンスや黄金世紀を重視しすぎること、各分野で列挙されたスペイン人の定義が曖昧であることなどに批判がなされているが、これらの分野におけるスペインの伝統、貢献を再評価するきっかけを与えることになった。しかしながらメネンデス・ペラーヨは、スペイン人自身の自国の人文科学史に対する認識の低さと研究不足を痛感するに至り、論争そのものへの関心を失い、伝統を重んじる博学的な研究姿勢をさらに強めていった。

スペイン学問論争は、スペインの過去、現状を否定することでスペインの再生を模索しようとするヨーロッパ主義者と、過去の歴史を発掘することでスペインの本質を確認しようとするスペイン主義者の間の溝の深さを証明するものでもあった。

4．ウナムーノ思想におけるスペイン論：アンヘル・ガニベーとの比較

メネンデス・ペラーヨの次の世代では、スペイン問題に対する新しい解釈が生まれはじめた。ミゲル・デ・ウナムーノは、この次世代を代表する思想家であり、マドリード大学でのメネンデス・ペラーヨの教え子の一人であった。またウナムーノは、1898年の米西戦争敗北を契機に生まれた知識人グループ「1898年の世代」の中心的人物でもあった。

ウナムーノがスペイン問題に具体的に言及し始めたのは、1895年に発表した『生粋主義をめぐって』からである。ウナムーノのスペイン論については、「1898年の世代」のさきがけとして知られ、『スペインの理念』（1897）において独自のスペイン論を展開するアンヘル・ガニベーのそれとの関連がしばしば指摘される。1891年に大学教授資格審査において知己となっていた二人であるが、ガニベーが自殺する1898年にグラナダの地方紙『エル・デフェンソール』において、『スペインの未来』というテーマのもとで紙上討論を行うまで、二人の間の音信は途絶えていた。こうした状況下で相互関連性を指摘されたことに関して、ウナムーノは次のように語る。「この際はっきりと言わしてもらうが、ガニベーと私の間に相互の影響があったとしたら、彼に対する私の影響の方が私に及ぼした彼の影響よりずっと大きいものであった。」[10]

しかし優れたスペイン哲学史研究家ホセ・ルイス・アベリャンが指摘するように

8）Abellán, José Luis: *Historia del Pensamiento Español*, p. 449

9）Ibíd., pp. 451-2. /Ferrater Mora, José: *Diccionario de Filosofía 3*, p. 2180.

10）Unamuno, Miguel de: *El porvenir de España*, p. 639.

「1898年の世代」の人たちからガニベーは、先に述べたララとならび、当初から高い評価を得ていた。[11] またウナムーノ、ガニベーの「孫の世代」にあたり、スペイン問題に造詣が深いペドロ・ライン・エントラルゴは、「スペインの問題をめぐる知的ないしは腕づくの論争を続行しようとしているのは、周知のように、進歩主義者と伝統主義者とである。〔…〕進歩主義の理想郷と伝統主義の理想郷のいずれも両々相共に、ありうべき歴史過程には帰しえなかった」[12] と指摘した上で、ウナムーノ、ガニベー両者の思想におけるスペイン問題についての近似性を指摘している。一般的に「1898年の世代」は、程度の差こそあるものの、旧世代の国粋主義的な側面を幾ばくか残していた。しかしウナムーノのスペイン論は、旧世代のスペイン論が科学・産業化の遅れ、教育制度の改革、あるいは歴史上の再発見といった具合に表面的、外面的な問題としてスペイン論を展開していたのに対し、このような進歩あるいは伝統といった歴史上の表象に影響されない民族の歴史の根底にある精神性を見出そうとしていた。この点においてウナムーノのスペイン論は、ガニベーのそれと同じ方向性にあり、まさに「新世代」のものであった。

確かに両者の思想に方向性の近似は見られるものの、民族の歴史を解釈する方法はしかしながら異なっていた。ガニベーの思想の根底には、自然への回帰とスペイン再生のための理念の確立があった。ギリシャ的な都市国家を自然の形態として捉えるガニベーの思想は、歴史の原点への回帰を志向していた。一方ウナムーノは、「内一歴史」と呼ばれる独自の歴史観を展開した。歴史は過去の産物であり、そこに存する伝統は過去から逃れられない繋がりを意味する。しかしウナムーノはこの過去へと向かう歴史、伝統を超越したところに、開かれた未来へと繋がる永遠の伝統を求めようとした。この回帰と超越という点に、ウナムーノとガニベーの内面主義に決定的な違いがある。ウナムーノのこの超越は、ガニベーの思想に見受けられる理想主義的な手法の限界を文字どおり超える点でもある。永遠の伝統は、生きた現在、すなわち生の中に求められるものであり、メネンデス・ペラーヨに代表される過去の事実を溯って探そうとする旧世代の博学的な傾向の研究者に対する批判でもあった。

「セネカ主義がスペインの宗教や倫理構造、慣習法にさえかかわる部分は大きい、というより測り知れないものがある」[13] と述べているように、ガニベーがセネカ哲学の影響を受けていたことはよく知られている。正しい理性 recta ratio を人の本質に据え、死による開放を唱えたセネカのストア哲学は、キルケゴール的な実存主義や、ショーペンハウアー、ニーチェの影響をも受け、反理性の生の哲学の立場を取るウナムーノ思想とは、相容れないものであった。ガニベーの思想の方向性に関してウナムー

11) Abellán, José Luis: '*Introducción*' en "*Idearium Español*", *p. 16.*

12) ライン・エントラルゴ、ペドロ、『問題としてのスペイン』、pp. 256-258.

13) Ganivet, Angel: *Idearium Español*, p. 38. (『スペインの理念』、橋本一郎/西澤龍生訳、p. 97.)

ノは、スペイン哲学の学派としてルイス・ビーベスのビビスモを案出したメネンデス・ペラーヨよりも、セネカ哲学をスペイン哲学に加えたガニベーの方がまだ当を得ていると指摘している。[14] だがビーベスの哲学には、セネカ同様にストア哲学の影響、理性を重んじる傾向が強い。このいささか感情的なウナムーノの指摘は、理性・科学に基盤を置くルネッサンスを重要視するメネンデス・ペラーヨが、スペイン・ルネッサンスの代表的な人文学者として、若くしてスペインを去りベルギーのブルージュを中心に活動したビーベスを挙げていることに対する批判や、コルドバ生まれのセネカの哲学には、スペイン文化の基柱の一つであるローマ文化的な要素が強く見られることが影響している。

スペイン再生の原点として、北部ビルバオ出身のウナムーノは、早い段階で国土回復運動が完了し、スペイン・キリスト教文化の中心となったカスティーリャ王国の歴史、風景を見据え、カスティーリャ精神をスペイン精神として受け止めた。これに対しガニベーは、まさにキリスト・ユダヤ・イスラームの三大宗教が色濃く融合した南部の文化圏で育っており、スペイン文化における生粋性に関しての解釈がウナムーノとは異なった。ガニベーによれば、カトリック色の極めて濃いカスティーリャの歴史、精神、風景のみにスペイン文化の生粋性を求めるならば、三大宗教の融合の場であった「開かれたスペイン」を否定し、積み重ねられることで象られてきた多面的なスペイン文化の存在そのものが否定されることになる。ここにウナムーノが展開するスペイン論の弱さがあることは否めない。ウナムーノのスペイン論は総体としてスペインを捉えた対ヨーロッパとしての性格が強いものであり、集合体としてスペインを捉えた対スペインとしてのスペイン論とは必ずしも言えない。だがカスティーリャ出身ではないウナムーノが、カスティーリャ精神をスペイン再生の原点に据えようとしたのは、「スペインの中のスペイン」にとどまらず「ヨーロッパの中のスペイン」をも視界に入れた上で、スペインという総体の再生のために、スペイン民族の、あるいはカトリック精神共同体としての求心的な精神、歴史をカスティーリャが自己の内部に持っていたと考えたからである。個としての生を求めながらも、総体としての生粋性を求めるところに、ウナムーノ思想特有の二極間の揺れを感じざるを得ないが、未来へと繋がる「内一歴史」、永遠の伝統の概念を導入することで、個の歴史を超える普遍性をウナムーノは求めたのである。完全なる真理を得ることができるのは、「矛盾を交互に肯定する方法」[15] によってであり、さらに「極端なものの力をきわ立たせることによって中庸なものが魂の中に活気を帯びる」[16] として、新しいスペイン論の可能性をウナ

14) Unamuno, Miguel de: *Del sentimiento trágico de la vida*, pp. 292-293.（『生の悲劇的感情』、神吉敬三/佐々木　孝訳、pp. 354-355.）

15) Unamuno, Miguel de: *En torno al casticismo*, p. 784.（『生粋主義をめぐって』、佐々木　孝訳、p. 7.）

ムーノは指摘するのである。

5．スペイン再生とヨーロッパ再生：ウナムーノ思想がめざしたもの

ウナムーノの思想は基本的に反理性の立場を取り、キリスト教的実存主義の枠に入るものである。1897年にウナムーノが体験した宗教的危機は、ウナムーノ思想のうねりの中でも最も大きく根源的なものであったとされる。そしてこの宗教的危機は、ウナムーノ思想をよりキルケゴール的な実存主義に、またニーチェ的な生の哲学へと推し進めるものであったと言われる。しかし前章の終わりで矛盾を交互に肯定するウナムーノの哲学的手法について述べたように、スペイン問題を前にしたウナムーノ思想のうねりは、スペイン的生とヨーロッパ的理性の狭間に位置するものでもあった。ウナムーノ思想の根底には、マドリード大学時代に積極的に学んだヘーゲル哲学の影響が残っていたからである。理性と生の二極間で生ずる悲劇的な感情こそが、ウナムーノにとって実存規定となるものである。理性と生の不均衡から生ずる感情を展開させてゆく考え方、ウナムーノ自身の言葉によれば「あらゆる統一化は、内的区別と歩調を合わせて、そしてそれ自体よりも上の統一に総体として従属する度合いに応じて進行」[17] させる哲学的手法は、まさにヘーゲルのアウフヘーベンを想起させる。

このような思想的曲折が、「スペインの中のスペイン」にとどまらず「ヨーロッパの中のスペイン」をも視界に入れた上で、スペインという総体の再生を試みるウナムーノのスペイン論に影響しているのである。

スペインとヨーロッパとの関係の中で、ウナムーノが最終的に模索したことは、スペインはヨーロッパにどのようにして貢献できるのかということであった。既に述べたように、ヨーロッパは宗教改革以降、理性的な歴史、プロテスタンティズム的な国家宗教の道を選び、スペインは近代化というその枠組みから逸脱した。しかしニーチェが「神は死んだ」と形容した近代ヨーロッパの物質文化の危機は、生の枯渇、信仰の不在によるものであるとウナムーノは考えた。この意味において、スペイン精神の豊かさについて思索してみること、ウナムーノ自身の言葉を借りれば、「一体いかなる内面的かつ永続的価値を有するかをスペイン人として自問してみることが大切」[18] なのであり、例えば、スペイン神秘思想をスペイン人自身が再発見することをウナムーノは望んだのである。こうして再発見された豊かさをヨーロッパに伝えることを、さらにウナムーノは提唱した。これは単なる伝統主義、ヨーロッパ主義という枠組みに収

16) Ibíd., p. 784.（同掲書、p. 7.）

17) Ibíd., p. 802.（同掲書、p. 40.）

18) Unamuno, Miguel de: *Sobre la europeización Arbitrariedades*, p. 923.（『ヨーロッパ化について　いくつかの独断』、桑名一博訳、p. 331.）

まるものではなかった。

ヨーロッパという概念についてウナムーノは次のように語る。「[ヨーロッパという]もともと直接的には地理的なものを意味していた概念は、魔法によってほとんど形而上学的とも言っていいカテゴリーに変えられてしまった。」[19] さらに近代化されたヨーロッパの悲劇については、「ヨーロッパを脱本質化する、すなわち脱カトリック化するに与って力があったのは、ルネッサンス、宗教改革、そして革命である。つまり彼岸の永遠の生という理想を、進歩、理性、科学という理想に置き換えたのである。あるいはもっと正確に言うなら大文字の科学に置き換えたのだ。〔…〕そして〔…〕、この科学は〔…〕破産した。だが科学は満足のゆくものではなかったので、幸福追求が終わりを告げることはなかった。しかしそれは富の中にも、知識の中にも、権力、快楽、あきらめの中にも、良心や文化〔教養〕の中にも見つけることはできなかった。かくしてペシミズムが訪れた」[20] と指摘する。このまさに虚無が支配するヨーロッパの況下で、逆説的ではあるが、近代化が遅れた国であったがゆえにスペインは本来的なカトリック信仰をその精神性に残し、しかもそれはスペイン神秘主義のように神と個人的な強い結びつきを得ることで生を充足させようとするものであったからこそ、窒息状態のヨーロッパに生を吹き込み、危機を救うことができるのだとウナムーノは訴えた。スペインがその精神文化のアイデンティティを確認し、これによりスペイン再生の指針を得ることで、ヨーロッパをも救えると確信したのである。

「私[ウナムーノ]は深いところから行われるスペインのヨーロッパ化、すなわち、ヨーロッパ精神の中からわれわれの精神と化しうるものを消化することは、われわれがヨーロッパ精神の諸分野において自己を押しつけ、彼らの精神を摂り入れるのとひきかえに、紛うかたないわれわれの精神を彼らに飲みこませるまでは、つまり、われわれがヨーロッパをスペイン化しようとするまでは、決して始まらないであろうという心底からの信念を持っている。」[21] ここに至りスペインのデカダンスは、ヨーロッパのデカダンスとなり、スペイン主義とヨーロッパ主義の本来背理する問題が、根幹において相関するべきものとして、ウナムーノ思想の中で結びついたのである。

---

19) Unamuno, Miguel de: *Del sentimiento trágico de la vida*, p. 285.（『生の悲劇的感情』、神吉敬三/佐々木　孝訳、p. 341.）

20) Ibíd., p. 284.（同掲書、pp. 338-339.）

21) Unamuno, Miguel de: *Sobre la europeización Arbitrariedades*, p. 936.（『ヨーロッパ化について　いくつかの独断』、桑名一博訳、pp. 351-352.）

参考文献

Abellán, José Luis: *El erasmismo español*, Madrid (Espasa), 1982.

————: *Historia crítica del pensamiento español*, 1-5/III, Madrid (Espasa), 1979-1991.

————: *Historia del pensamiento español*, Madrid (Espasa), 1996.

————: *'Introducción', en "Idearium Español"*, Madrid (Biblioteca Nueva), 1996, pp. 15-33.

Caro Baroja, Julio: *El señor inquisidor y otras vidas por oficio*, Madrid (Alianza), 1988, 3ª ed. .

Castro, Américo: *España en su historia Cristianos, moros y judíos*, Barcelona (Critica), 1984, 3ª ed. .

————: *Cervantes y los casticismos españoles*, Madrid (Alianza), 1974.

Ferrater Mora, José: *Diccionario de filosofía*, 1-4, Madrid (Alianza), 1990, 7ª ed.

Ganivet, Angel: *Idearium Español*, Madrid (Biblioteca Nueva), 1996.

Garcia Escudero, José María: *Los españoles de la conciliación*, Madrid (Espasa), 1987.

Jutglar, Antoni: *La España que no pudo ser*, Barcelona (Anthropos), 1983, edición corregida y ampliada.

Laín Entralgo, Pedro: *Obras*, Madrid (Plenitud), 1965.

Sánchez-Albornoz, Claudio: *Aún Del pasdo y del presente*, Madrid (Espasa), 1984.

————: Dípticos de historia de España, Madrid (Espasa), 1982.

Unamuno, Miguel de: *'Del sentimiento trágico de la vida'* en "*Obras Completas*" , VII, Madrid (Escelicer), 1966, pp. 107-302.

————: *'El porvenir de España'* en "*Obras Completas*" , III, Madrid (Escelicer), 1966, pp. 635-677.

————: 'En torno al casticismo' en "*Obras Completas*" , I, Madrid, (Escelicer), 1966, pp. 773-869.

————: *'Sobre la europeización Arbitrariedades'* en "*Obras Completas*" , III, Madrid (Escelicer), 1966, pp. 925-938.

ウナムーノ、『スペインの本質』(ウナムーノ著作集　1)、佐々木　孝/桑名一博他訳、法政大学出版局、1990、第三刷。

————、『生の悲劇的感情』(ウナムーノ著作集　3)、神吉敬三/佐々木　孝訳、法政大学出版局、1983、第二刷。

グァルディーニ、『近代の終末—方向づけの試み—』、仲手川良雄訳、創文社、1980、第二刷。

クシトフ・ポミアン、『ヨーロッパとは何か　分裂と統合の1500年』、村松剛訳、平凡社、1994、第三刷。

佐々木　孝、「内側からビーベスを求めて(三)」、『東京純心短期大学紀要』第8号、1995、pp. 45-64。

メネンデス・ピダル/ガニベー/ライン・エントラルゴ、『スペインの理念』、橋本一郎/西澤龍生訳、新泉社、1991。

España y Europa
—— A través del pensamiento de Miguel de Unamuno ——

Tetsuyasu SUMITA

Se decía que España, en la historia de las Ciencias Humanas, desempeñó una actividad muy limitada y pasiva. Sin embargo, si nos fijamos en la historia de Córdoba, donde se realizaron sistemáticamente las traducciones de las obras filosóficas de Roma y Grecia, y en Toledo, donde Alfonso X fomentó la actividad cultural de la escuela de traductores, inmediatamente nos daremos cuenta de las contribuciones admirables del pueblo en dichas ciencias.

Pero esta "España abierta al mundo científico" venía convirtiéndose en "la España cerrada" conforme al movimiento de la Reforma y a la decadencia del Imperio de Habsburgo. Ante la inmovilidad del pueblo se plantean, especialmente desde el siglo XVII, dos teorías: el tradicionalismo o españolismo, y el progresismo o europeísmo.

Miguel de Unamuno, uno de los representantes de la *nueva generación* del siglo XIX-XX, conociendo el límite de aquellas dos escuelas de la generación antigua, el tradicionalismo y el progresismo, llegó a formar su propio pensamiento: preocupación por la identidad de España sin perder - lo que él llamaba- *mi identidad*. Después intentó integrar la *Europa moderna agonizante*, manteniendo la identidad del pueblo español, por ejemplo su religiosidad. Esta es la única manera de salir de la decadencia, pensaba el pensador vasco-castellano, porque la decadencia de Europa no es sino la de España.